

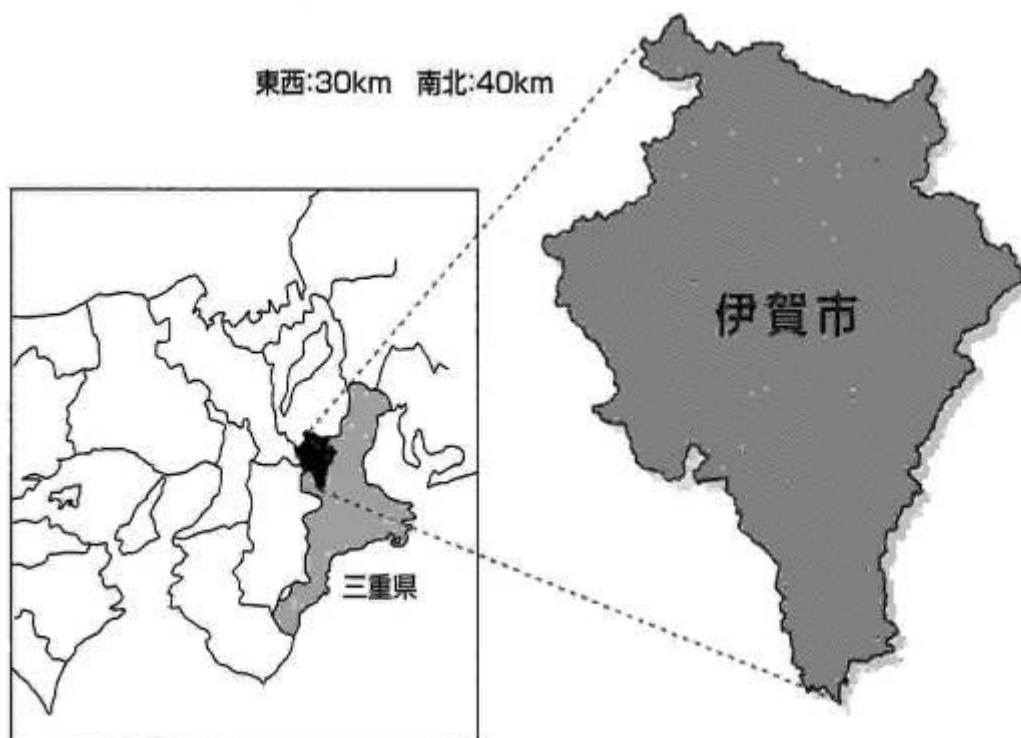
平成20年度

## 水源地域対策アドバイザー派遣制度報告書

### 1. 伊賀市の概要

平成16年11月1日に上野市、阿山郡伊賀町、阿山町、大山田村、島ヶ原村、名賀郡青山町の6市町村が合併（新設合併）し、伊賀市が誕生した。

京都・奈良や伊勢を結ぶ大和街道・伊賀街道・初瀬街道を有し、古来より都（飛鳥、奈良、京都など）に隣接する地域として、また、交通の要衝として、江戸時代には藤堂家の城下町や伊勢神宮への参宮者の宿場町として栄えてきており、地理的・歴史的背景から京・大和文化の影響も受けながらも、独自の文化を醸成し、俳聖松尾芭蕉翁や伊賀流忍者のふるさととして歴史文化の薫るまちとして発展している。



## 2. 青山地域（旧青山町）と川上ダムの概要

青山地域は、三重県の西部、伊賀盆地の東南端に位置し、低地・台地が少なく、山地と丘陵地が大部分を占める。比較的平坦な土地は、北部の阿保・羽根地区を中心に、伊賀盆地の外縁として広がっている。この地域は、町を東西に流れる木津川と南北に流れる前深瀬川の合流するところであり、集落や農地はこの河川に沿って多く点在し、町の政治経済の中心となっている。

川上ダムの建設地は、町の中心地より前深瀬川を上流へ約2kmの川上川との合流点に位置し、昭和42年に建設省が予備調査を開始。平成16年には川上地区の水没家屋38世帯が全て移転し、現在は付替道路（1路線完成）を施工中である。

### 川上ダム完成予想図



### 3. 青山ハーモニー・フォレスト整備計画

川上ダム建設を契機として旧青山町の振興を図るべく、昭和63年に国土庁事業である水源地域対策アドバイザー派遣制度を受け、地域の活性化方策などについて専門家のアドバイスを受けた。また、平成元年度に同じく国土庁事業である、水源地域対策事業費補助金を受けて、水源地域対策を、一層効果的なものにするため、町の関係課係長、関係機関、学識経験者から成る水源地域再建計画協議会を設置し、調査検討を行い川上ダム水源地域再建基本計画「青山ハーモニー・フォレスト21構想」を策定した。

また、平成6年度には基本計画に基づき、川上ダム水源地域再建実行計画を策定した。

#### 【整備方針】

整備地区を「青山ふれあいの柱ネットワーク」の中核拠点として、様々な情報提供、案内を行うとともに、野外生活、自然探訪、木工制作、農業体験等の様々な活動を通して、人と人、人と自然との絆を結び合わせる場とする。

- 地域づくりと地域交流の拠点として
- 都市の再生（レクリエーション）空間として
- 自然・環境への理解を深める場として

#### 【整備規模】

39ha

#### 【主な施設】

- ・ふれあいの杜センター
- ・木工クラフト館
- ・木工の杜
- ・森林文化館
- ・遊びの森
- ・芝生広場
- ・野鳥、昆虫の森
- ・ハイランドオートキャンプ場
- ・デイキャンプコーナー
- ・ハイランド牧場
- ・体験ファーム

しかし、計画から事業実施をする間、社会情勢が大きく変化し、また、町の財政力の低下等から平成14年度に整備規模の見直しを行った。

**【整備規模】**

15.7ha

**【主な施設】**

- ・学習棟
- ・炊事棟
- ・シャワー棟
- ・芝生広場
- ・ちびっこ広場
- ・オートキャンプ場
- ・教育の森
- ・パークゴルフ場

4. 希望するアドバイスの内容

「青山ハーモニー・フォレスト」は昭和63年に本アドバイザー派遣制度により地域の活性化方策について、アドバイスをいただき実現した施設である。しかし、財政難から事業エリアの縮小や構想にあった「世界の森」など、当初計画に比べ規模の縮小を行った。

結果、同施設については当初予定していた集客数を大幅に下回っており、ダム上流の地域振興の核となり得るかどうか疑問である。

については、同施設の集客力の強化、ダム上流地域の観光資源の発掘、及び市内各施設の運営・連携方法等、上流地域の振興策についてご教授いただきたい。

## 5. 水源地域対策アドバイザー派遣の概要

### (1) 第1回水源地域対策アドバイザー派遣概要

開催日時 平成20年8月4日～5日

開催場所 会議：伊賀市青山支所

視察：支所管内及び市内

#### ○1日目

##### 参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎
国土交通省水源地域対策課	係長 鵜飼 宣行
伊賀市青山支所	支所長 城山 廣三
	副支所長 奥田 充法
伊賀市青山支所産業建設課	課長 藤原 四郎
	副参事 柘植 清
	主幹 若出 正裕
	主幹 山本 幸一郎
	主幹 小西 康章
	主任 中嶋 満次

議題：伊賀市の概要、青山ハーモニー・フォレストの概要

内容：アドバイザーに状況を把握していただくため、伊賀市の概要、青山ハーモニー・フォレストの概要説明や川上ダム上流の7集落、周辺の観光施設等について説明



#### アドバイザーからの意見

- ・観光対策は、局地を対象にして考えるものでなくて、広域的に考えなければならない。（ダム上流ではなく、下流も結びつけて伊賀市全体を見てダム周辺を観光化できる検討が必要。）
- ・観光パンフレットが非常に分かり難い。寄せ集めで、いかにも行政が制作した物である。観光客の立場で考えると、例えば、歴史のルーツでコース設定したもの。美味しいところ巡り。ウォーキングコース等目的を絞る。
- ・ダム上流の物語を作っこそ、ハーモニー・フォレストも生きてくる。ハーモニー・フォレストだけをどうにかしようとしても、どうにもならない。
- ・森が人工林のスギ、ヒノキでは学習棟を使っでの環境学習も難しい。
- ・ダムにより不利益になる地区の、生活向上並びに景観を含めた集落のソフト・ハードに亘る現状を悪化させない方策の議論の必要性。
- ・農業ならびに農的生活維持を目的にした集落の利用を促進する取り組み（農家民泊等）とハーモニー・フォレストの活用をどのように考えるのか。

#### 現地視察（青山支所管内）

- ・ダムサイト予定地
- ・ダムサイト上流集落（高尾、霧生、腰山、諸木、老川、種生）
- ・青山ハーモニー・フォレスト
- ・大村神社
- ・初瀬街道

#### アドバイザーからの意見

- ・各集落を見て、「この風景だけでも外来客取り分け外国人にとっては十分魅力ある観光スポットになる。
- ・地域の学校の先生など、行政とタッグを組んで活性化に貢献しようとの意欲を持つ人を発掘する必要がある。行政だけでは無理がある。
- ・オートキャンプ場は、オートキャンプ協会の認定を受けるとガイドブックに載るなど集客効果がある。

#### ○2日目

##### 参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎
国土交通省水源地域対策課	係長 鵜飼 宣行
伊賀市青山支所産業建設課	課長 藤原 四郎
	主幹 小西 康章

現地視察（伊賀市内）

- ・ 上野遊水地
- ・ 岩倉峽（公園）
- ・ 鍵屋の辻
- ・ 崇広堂
- ・ 上野城周辺
- ・ 大山田温泉
- ・ 青山高原風力発電施設

（２）第２回水源地域対策アドバイザー派遣概要

開催日時 平成２０年１０月１７日～１８日

開催場所 視 察：名張市内

意見交換：青山ハーモニー・フォレスト

○１日目

参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎		
国土交通省水源地域対策課	係長 鵜飼 宣行		
伊賀市青山支所産業建設課	課長 藤原 四郎		
	主幹 小西 康章		

現地視察（名張市内）

- ・ 美旗古墳群
- ・ 藤堂家邸跡
- ・ 赤目四十八滝
- ・ 青蓮寺ダム
- ・ 比奈知ダム

○２日目

参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎		
国土交通省水源地域対策課	係長	鵜飼 宣行	
博要住民自治協議会	会長	森内 佐武郎	
NPO 法人博要の丘	代表	上島 むつ美	
種生区	区長	新 正信	
伊賀パークゴルフ協会	会長	川合 八司	

青山支所管内自治連合会	会長	中本 美一
独立行政法人水資源機構川上ダム建設所		第1用地課長 芦田 哲郎
		比嘉 真知子
		調査設計課 廣瀬 真由
伊賀市産業振興部	部長	半田 泰士
伊賀市青山支所産業建設課	課長	藤原 四郎
	副参事	柘植 清
	主幹	若出 正裕
	主幹	小西 康章
	主任	中嶋 満次

## 意見交換会

### ◎アドバイザー

- ・当該地区のみならず、我国全体に亘り中山間地の活性化が大きな課題とされている。取り分け、これまでの鑑賞対象に留まっていた自然の位置づけが、生物多様性の保全や生態系サービスの見直しなどから、自然資本財としての位置づけを担う方向にある。生態系サービスの最大の供給地である中山間の人々が柱となって、国土保全や生態系サービスの維持機能を担うことに対し誇りを持って暮らしていける条件が一刻も早く整うことが望ましい。そうした意味からも青山地区はまだ頑張っている方だと思う。
- ・化石燃料など資源が有限であることが明確になろうとしている今、自然の恵みつまり生態系サービスを恒常的に最大化する知恵が必要となる。自然資源とりわけ多様な生物社会から多くのサービスを、科学技術を活用しながら受け取る仕組みが世界的に重要なテーマとなりつつある。そこで着目されるのが70、80年前の日本人の自然共生の生き方である。それが未来に対する大きな手本になるからである。
- ・観光という言葉は、中国の易经から来ている言葉で、国の光を観るといった意味である。バスで来て、見て、帰るのは物見遊山であり、観光ではない。
- ・正直、ハーモニー・フォレストのような施設は何処にでもある。物事と言う言葉があるが、物を見るだけであり、物を事にまで広げ、事に誘われて来訪する人々を増加させるような戦略とそれを基盤に滞在客を誘引する方向が重要である。
- ・近隣の比奈知ダムを見たが地域と結びつけるような物語性が乏しい。
- ・地域の潜んでいる地域の人たちだけが知る魅力を教えてもらいたい。



◎博要住民自治協議会会長

- ・この地域は何によって生きていけるのか。例えば農業でこの地域が米で生きていくことは難しい。
- ・高齢化が著しく、限界集落ほどの状況ではないものの将来が不安である。
- ・都市部などから若い人に来てもらいたいが、興味をもってくれるだろうか。10月13日のふれあいフェスタが成功したことから、他地域との連携ができないか、観光マップづくりができないかと考えている。誰かが何らかの思いをもって活動することが重要と考える。

◎NPO法人博要の丘代表

- ・この地域が好きだという思い入れをもつことが大切だと思うが、なぜ、この地域の元気がなくなってしまうのか。
- ・地域イベントに地域住民が参加する、人が連携する仕組みを大切にしたい。

◎種生区長

- ・区長という立場にあって、この村、土地や山林といった環境をどうにかして守りたいが、活動などに参加するのは65歳以上が多数という現状である。
- ・区内の総人口226名に対して、65歳以上は115名で高齢化が進んでいる。最大の悩みであるが、定期的な会合を開いたり、皆で模索中である。大阪と名古屋の中間地という好立地であるのに、若者が出て行ってしまう。

◎伊賀パークゴルフ協会会長

- ・10年前から地元では活性化について議論しているが、実現化が難しい。
- ・今後のハーモニー・フォレストの運営をどうしたらいいのか。都市と一体化してもてなす、ふれあうような活動が重要ではないか。

◎青山支所管内自治会会長

- ・伊賀市最南端である高尾は、高齢化率が4割に近い状況ではあるが、ゲートボールなど生きがいをもっていて活気がある。一方で、若者は仕事に熱中するあまり、地元ボランティア等への参加が見受けられない。
- ・地域から心が離れている。千方伝承会は、最近雨乞い行事復活イベントを手がけ始め、探せばあるのではないかと気づいた。地域を見直すこと、実情をつぶさに見つめることが大切であると感じている。

◎伊賀市産業振興部長

- ・伊賀市の観光は、施設観光からの脱皮を迫られている。エコ／グリーンツーリズム等への転機などが考えられる。

◎水資源機構川上ダム建設所

- ・宮ヶ瀬ダム、日吉ダム、大山ダム、岩屋ダムの地域活性化事例の紹介



以上の意見を踏まえて、

◎アドバイザー

皆さんの意見を聞き、地域活性化にとってもっとも不可欠な「内発性」がこの青山地域に見受けられたことが素晴らしい。何を活性化の成功とするかという点について、機構から「集客数か、収入か、満足度か」という問題提起があった。この設問は都市ダムに顕著な課題と思う。中山間地域に於いてこのような3点全てを満たすことは難しいだろう。しかし後者2点については不可能ではない。群馬県中之条では廃校を映画撮影スポットとして利用したり、地域特性が実に乏しい東北の岩手県二戸では、平成4年から地域外の人にその地域の「宝」を探してもらい「宝探しの地域」と銘打って「宝マップ」なるものをつくり大いに成功した。

また、機構や伊賀市にはダムの戦略的な立地という意味でも、上下流地域の交流のしかけ、しくみ作りを是非お願いしたい。東京都の世田谷区は群馬県の川場村と連携し、相互に「第二のふるさと」と認識するほど交流に成功している。伊賀市は、足は中部圏に、気持ちは大阪（関西）に向いている。これを利用し、受益者との交流を通じて心を深める観光を目指せるのではないか。例えば高知県の早明浦ダムでは、供給者である高知県が水源地が果たす役割についての社会科の副読本を作り、受給者である香川県の学校に配布し上下流の交流に成功している。こうした事例からも、環境教育レベルに立脚した交流の戦略化も可能であろう。



(3) 第3回水源地域対策アドバイザー派遣概要

開催日時 平成21年1月21日～22日

開催場所 視 察：青山支所管内

意見交換：伊賀市本庁

報告会：青山ハーモニー・フォレスト

○1日目

参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎		
	町田 輝次		
国土交通省水源地域対策課	係長	鵜飼 宣行	
伊賀市青山支所産業建設課	課長	藤原 四郎	
	主幹	小西 康章	

現地視察

- ・旧博要小学校
- ・甌穴

市長との意見交換会

参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎		
	町田 輝次		
国土交通省水源地域対策課	係長	鵜飼 宣行	
伊賀市	市長	内保 博仁	
	副市長	角田 康一	
伊賀市産業振興部	部長	半田 泰士	
	次長	橋居 徳治	
伊賀市産業振興部商工観光課	課長	花岡 穰一	
伊賀市青山支所	支所長	城山 廣三	
	副支所長	奥田 充法	
伊賀市青山支所産業建設課	課長	藤原 四郎	
	主幹	小西 康章	

涌井アドバイザーより報告

- ・当該地域の観光資源は、「伊賀上野」「名張」、とりわけ伊賀と言う全国ブランドを持つ観光地をその後背に控えているものの、既にその全国ブランドも過去形になりつつある。つまり一次型（一度行ってみれば良いタイプ）であり、資

源性は高いながらも、それをカルチベイトするに相応しい観光地形成の努力が欠落している。

- ・名張市についても伊賀市の縮小的様相であり、伊賀市以上に魅力が乏しい。
- ・率直に指摘すると、アドバイスのために訪問を予定した当初は、伊賀上野、名張に対し、一般の観光訪問を計画する人と同様、観光資源とその連続性に対し、かなりの期待感を抱いていた。しかし現地調査のつど失望感に襲われた。その原因は一言で言って「名前負け」と言ってもよい印象である。
- ・その双方の狭間に「川上ダム水源地域」は位置しており、ダムが出来たからと言ってそのダムが新たに大きな観光行動を生み出し、当該地域の魅力を倍加させるといった可能性は低い。
- ・ダム関連事業で整備された公園「青山ハーモニー・フォレスト」には、従来の施設に加え、新たにパークゴルフ施設が整備されるなど拡充が図られる等、合併前から地域が意欲的に取り組んできた。また「ふれあいフェスタ」と名づけられた地域主体のイベントが定着し、手作り企画が効を奏し多くの市民参加を得つつある。観光施設としては、その水準と目論見にマッチングしたニーズの掘り起こしに苦勞をしている。
- ・当該地域の観光振興策は、水資源対策地域との関連で言うならば、ダム湖を主にした観光振興策を考えるのではなく、基本的にはダム建設に伴う関連公共事業を観光振興に戦略的に活用する方向で検討されることが望ましい。
- ・観光とは「住んでよし、訪れてよし」と観光立国宣言に記されているとおり、あくまでも地域住民の内発的な意欲、例えて言うならば「在所一番」の発想と、総合的な参加形態が無くては成り立たない。
- ・「多様な空間に、多様な主体が、多様な手段で参画」する機運を観光というテーマから醸成する機会とする事が最も肝要であろう。
- ・ハーモニー・フォレストで展開されている、地域住民主体の参加型イベントは実に良い社会実験的实践と言える。
- ・そうした意味から、観光の概念を広く捉え、観光業者に関わるだけの論議ではなく、一般市民の心地よい未来にも深く関わる問題として啓発し、観光振興策を地域振興戦略の中核に位置づけるべきである。まさに「住んでよし、訪れてよし」である。

アドバイザーからの報告を受けて

- ・伊賀市は全体的に裕福な町。歴史、文化があった町で熱意が少し弱い。
- ・町全体が高齢化している。行政主導型は長続きはしない。行政はしかけ程度で関わるのが良い。
- ・もう一度町に元気を取り戻したい。集落が残っていくような町づくりがしたい。

○2日目

参加者

水源地域対策アドバイザー	涌井 史郎
	町田 輝次
国土交通省水源地域対策課	係長 鵜飼 宣行
三重県土地・資源室	副室長 森 高広
博要住民自治協議会	森内会長外1名
NPO 法人博要の丘	上島代表
種生区	新区長外2名
伊賀パークゴルフ協会	川合会長外1名
青山支所管内自治連合会	中本会長外3名
独立行瀬法人水資源機構川上ダム建設所	芦田課長外7名
伊賀市産業振興部	次長 橋居 徳治
伊賀市産業振興部商工観光課	課長 花岡 穰一
伊賀市青山支所	支所長 城山 廣三
	副支所長 奥田 充法
伊賀市青山支所産業建設課	課長 藤原 四郎
	副参事 柘植 清
	主幹 若出 正裕
	主幹 小西 康章
	主査 上島 宏子
	主任 中嶋 満次

報告会

①「水源地域対策アドバイザー派遣制度について」の概要説明

ー国土交通省水源地域対策課 鵜飼係長ー

- ・水源地域対策の仕組みとしては、ダム事業者による補償、水源地域対策特別措置法に基づく措置、基金による事業、国のソフト施策等の4つの柱があり、川上ダムにおける水特法の措置としては、道路事業・水道事業などのハード整備が実施されている。
- ・本アドバイザー制度は、水源地域対策のソフト事業として昭和63年度にスタートし、これまで、北海道から九州までの39市町村に対して、延126人の先生を派遣している。今回は、「ハーモニー・フォレスト」を活用したいということで、三重県を通じ伊賀市より要望があったため、それに適したアドバイザーということで、涌井先生を派遣させていただいた。
- ・これまで、昭和63年度に一度、青山町の方にアドバイザーを派遣させていた

だき、整備方針等の提案を行っているが、その後のフォローアップがなされておらず、やり放しになってしまったところはあったかと思う。

- ・また、2年に一度アドバイザーの先生方に集まっていただく連絡会議というものを実施しているが、先日行った会議の中で、フォローアップはぜひ必要だという声もあった。今から涌井先生より報告（アドバイス）を行っていただくが、今回で終わりではなく、その後の調査を実施することで、足りない部分についてはまた先生を派遣させていただく等、フォローアップしていくことも考えている。

## ②報告会

### －涌井アドバイザー－

- ・わずか3回（3日）調査に来て、ダム上流部でいえば前深瀬川上流の高尾地域、川上川上流の矢持地域、さらに博要・種生地域、下流で言えば阿保、上津地域を調査したただけでありアドバイスには自ずと限界がある。
- ・しかし僅かな調査期間と場所ではあるが、それなりに一つの結論を得た。調査のアドバイスのポイントは、ハーモニー・フォレストを今後どうするのかというところにある。もちろんその点も大事ではあるが、それ以上に考えなければいけないのは、川上ダム建設後の上流部を今後どうしていくのか、その将来像を描くというのが一番重要な観点である。そうした観点の置き方によりハーモニー・フォレストの役割も異なってくるからである。
- ・現実の問題として、この青山地域の観光の将来像を描く上に、伊賀上野・名張の観光を将来どのように構想するのかということが密接不可分となるからである。
- ・伊賀市（上野）は観光拠点として魅力があるのかどうか。みなさんどのように思われるのか？私は失礼ながら市長に多くの苦言を呈した。全国ブランドとなっているこれまでの観光要素をなぞるだけでは未来に向け著しく魅力を欠くことになる。例えば、「鍵屋の辻」をめぐる物語を知っているのはせいぜい55歳以上の人。若い人は全く知らない。下手をすれば、鍵屋という食べ物屋か、或いは鍵を扱う店がそこにあるかと思ってしまう。つまり、歴史的観光資源と言う視点からは、伊賀上野も名張も他に比類ない優れた観光資源を持っている。しかし敢えて言えばそれに甘え過ぎている。団体中心の周遊型の観光指向を捨て切れていないからである。折角類まれな観光資源を持っていながら、一度あの旧跡を訪ねたからもういい、いわば一度行って写真を撮ったらそれで二度と来ないタイプの観光地に甘んじている。行ってきたという自慢話にしかならない。
- ・ここには潜在化された観光資源がたくさんある。例えば、「藤原の千方」伝説の遺構等である。またそれぞれの集落の景観は、（皆さんは日常である為に気づいていないかも知れないが）実に美しいし、其々個性溢れた文化を伝承している。

意外とそこに暮らしている人々は、自分たちの地域の宝に気づかない。よそ者が見たら宝でも、自分たちは余りにも日常であるがために、大したことはないと思ってしまう。ところが岩手県二戸の例のように他の地域の人には、地域の宝が見えるもの。

- まずやるべきことは、「住んでよし、訪れてよし」「在所一番」自分達の（私の）住んでいるところが一番！の気持ちを、もう一度地域の人々の心に呼び覚ますことである。そうした気づきが、観光客と地域の人が交流するシナジー効果を生み出す。結果さらに「ここが一番！！」と感じる正のスパイラルを生み出していく。それが結果として効果的な観光交流を生む。そうした取り組みがこの青山地域を未来に残す大きな力となっていく。
- このままでは、このあたりの山林が何年後かには風倒木に悩まされ間伐もされず相当荒れてしまう危険性がある。そうした流れを放置すれば、例えダムが完成しても、一旦大雨が降るとかなりの流木がダム湖に流れ込むことになってしまうでしょう。河川・ダムにかなりの負担を掛けることになる。風致施業と言う専門用語があるが、ダムの水源地として、観光資源形成の狙いを考え、今までの間伐補助ではなく、新しい間伐・除伐の補助策を県・国に問いかけ見た目だけでも綺麗に手の入った林地形成に努めて欲しい。
- すがすがしい山林と荒れている山林というのはその地域の人達の服装地域の身だしなみを表すことになる。そのための予算の問題もあり大いに知恵を絞って欲しい。
- ハーモニー・フォレストは、大変に手厳しい指摘ではあるがハードの視点からは、少しも魅力的ではない。しかし、もう一点の別の目で見ればすごく魅力的なものになり得る。つまりこのハード（建物）は魅力的ではないが、このソフト（人）は実に魅力的である。その理由は、市の職員の熱意、種生地区のみなさんの協力、あるいは、ここを皆のコミュニティ、祭りの場としていく意欲が旺盛であると判断されるからである。これはかけがえのない「事」である。ぜひそうした人々の繋がり、ヒューマン・ウェアによる魅力の創出を大事にして、意欲のある方々を幅広く募り、ここを地域のコミュニティの一大拠点にし、それを観光交流に結びつける努力を重ねてほしい。
- 矢持・高尾・博要各地域を一つの交流拠点にする。はじめから観光拠点を目指すより、交流拠点に仕上げていく。考え方一つでまったく違いが生まれる。人々が出会う。集落同士の人が出会う。知らない人同士が出会う。そういう場にしてほしい。観光は集客量が問われ、また一方で一過性の客あしらいに終わる。交流は、集客量より質的な要素、深める魅力が物理的景観とともにそこに暮らす人々の心が投影されるもの。そうした方向を選択する事により、宝石のように輝いている集落とハーモニー・フォレストが、21世紀型の観光（地域とそ

ここに暮らす人々の心の繋がりを深める) にマッチングできる。そうした方向に道筋を進められるならば青山地域の未来を託す、絵が書けそうに思える。



ー参加者からの主な意見・質問ー

- ・高齢者ばかりで、地域に活力がない。思いはあるが、動ける人が少ないがどうすればいいか？
- ・都市の人との交流・来てもらうことについてどうしたらいいか？
- ・千方などのこの名勝の生かし方についてどうすればいいか？

涌井アドバイザーより

- ・ダムの上流部でここまで好条件を持っている地域は全国で2割程度ぐらいしかない。つまり、他のダム上流域に比べればはるかに条件はいい。他のダムの悲惨な上流地域みたいになるのではという意見には不賛成。この地域には大きな可能性がある。だから、今のうちにどうするかを時代の趨勢を見極めながら熟慮する必要がある。「在所一番」という言葉があるが、そうした地域に対する誇りを自ら捨てた地域は、発展しない。
- ・高齢化の問題について語れば、加齢と老化現象は違うこと念頭に置かねばならない。ここをまちがえてほしくない。加齢は誰にでも平等におきる。対して老化は、遺伝は別にして、生活習慣・環境・モチベーションのあり方で全く生き様が違ってくる。高齢化率と、地域の活力がないというのを結び付けるのは、大変申し訳ないけど言い訳に近い。65歳以上に加齢した方々にも、いたずらに老化しないようどんどん動いてもらうほうがいい。
- ・但し、地域で何かををするとしても、例えば約110戸（高尾）の地域であれば、半分（50戸）しか集まらない現実があるかもしれない。確かに昔と比べたらさ



びしい。しかし「50戸も集まってくれる」と考えたらいい。50戸も集まるならば立派なもの。大事なのは、「ないない」と愚痴るのではなく、「これもあれもある」と言った地域の人の熱意が「ある」事が大切。

- 米国の銀行のクラッシュや自動車産業の急速な低迷現象は、視点を変えると「産業革命」以来の時代が終焉しつつあることを意味している。

これからの方向は着実に「環境革命」の方向に我々人類は一步を踏み出さざるを得ない。そうした時代に人々が求める方向は、心と共に命のありよう、そして文明的な存在ではない、生物的存在として人間像であり、人と人のつながりと共に、人と自然の繋がりを再確認したいと言う動機がうねりとなって起ころうとしている。

- そうした時代に、自然とせめぎ合いながらも共生している暮らしを営み、伝承と言う形でその知恵を継承する中山間地域に対する憧憬は必ず強まる。いたずらにそうした生活を「農業」と言う生産量など経済価値のみで捉える概念ばかりではなく、「農的生活」を維持する事により生み出される様々な公益性や便益を支えているという自覚と、それが未来を考える上に重要な要因であることを積極的に発信する姿勢が大切。
- つまりこれまで明治以来の120年余が産業革命をフォローし人口急増社会を支えるために必要な社会資本の充足を目指してきた我国が、今後は自然と共生する循環型社会を支えるため、又新たな産業のシーズであり宝庫である自然を資本財として捉える方向が明確になろうとしている。そうした意味でも自然を知らない子供たちに自然とはどのようなものか、その怖さと共に様々な便益があるという事実を教える「環境教育」の場としても、ハーモニー・フォレストをその中核施設に位置づけ、青山地域独自の環境教育プログラムに各集落が何かの役割を担うと言った構想もあってよいのではないか。



## 7. 終わりに

今回のアドバイスの中で、青山ハーモニー・フォレストだけでは他市町村から人を集客するには魅力が足りないことがわかった。同施設について地元から愛され、活用される施設を目指すことを手始めに、地域振興の核となる施設をめざすことが重要であり、そのための組織づくりを優先する。

また、地域資源という点から、アドバイザーの言葉に「中山間は宝の山」との教えを活かし、地元全体による活性化策の模索とこれの実行計画をつくることで、「住んでよし、訪れてよし」となる地域づくりを支援する。このことにより、ダム上流の住民が生き生きと暮らせる地域づくりを行っていく。

このことから、同施設が地元から愛され、地元の拠点となる施設を目指すため、現在、運営、管理について地元種生区と協議を行っているところであり、平成21年度は委託業務により地元種生区が施設全体の維持管理を行うことで地元の組織づくりの強化、さらに、平成22年度以降は、施設全体の維持管理に加え、施設の運営、集客等の計画を地元と共に取組むことで、同施設が地域活性化の核となるよう目指していきたい。